田中康夫 × 浅田彰

今月の憂いゴト

オバマ大統領の来日から、日米安全保障条約と中国、台湾の「ヒマワリ学生運動」、書店のあり方まで！

東京・代官山にある『代官山蔦屋書店』で開催された「憂国呆談トークイベント」を前に、会議室で行われた田中・浅田両氏の対談。トークイベントも盛り上がったが、会議室での対談はもっと熱かった！

photographs by Hiroshi Takaoka　text by Kentaro Matsui

憂国呆談

season 2

オバマ大統領が来日。安倍首相の交渉はいかに？

浅田　4月23日にバラク・オバマ大統領が来日した。アジア歴訪途上の慌ただしい日程にもかかわらず、日本政府は国賓として迎え、安倍晋三首相との関係修復を演出しようと躍起だったけど、うまくいったとはとても思えない。オバマは「尖閣諸島を含めて日本の施政下にある領域」（ただし「領土」とまでは言わない）が日米安全保障条約第5条でカヴァーされると明言、そのかわり再三にわたってTPP交渉の合意を求めた。用心棒の論理そのものだね。で、日本はかなり譲歩させられたにもかかわらず、最後まで交渉がまとまらず、結局大筋合意は先送りに。どちらにとっても失敗だった。

田中　「日米安全保障条約の下でのコミットメント」は「尖閣諸島を含め、日本の施政の下にある全ての領域に及ぶ。この文脈において、米国は、尖閣諸島に対する日本の施政を損なおうとするいかなる一方的な行動も反対する」という文面が今回の日米共同声明だからね。2010年に中国漁船と海上保安庁の巡視船が衝突した際、当時のヒラリー・クリントン国務長官が尖閣諸島は日米安保第5条の適用対象と明言している。オバマ自身も共同会見で述べたように、従来から一貫した米国の見解を繰り返したにすぎない。

　逆に僕は、「日本が自ら守らなければ（日本の施政下でなくなり）我々も尖閣を守ることはできなくなるんですよ」とリチャード・アーミテージが以前に語ったのを思い出した。つまり、領有権だけでなく施政権も日本が確保していて初めて安保条約の適用対象ですよって話。尖閣は安保の対象だが領有権問題には中立というのが民主党、共和党を問わず米国のスタンス。だから、仮に第三国が尖閣を攻撃しても、この段階で守るのは自衛隊で米軍は出ませんよと。で、守り切れなければ第三国の管轄下になるから、引き続き出動しませんよと。

　だから、そんな無様な展開にならないように、隣国を刺激する居丈高な言動は慎みなさい、とオバマは首脳会談後の共同会見でも明言している。「私が会談で安倍首相に対して強調したのは、この問題を平和的に解決する重要性だ。言辞を低く保ち、挑発的行動を取らず、いかにして日中両国がお互いに協力可能かを決めるべきだ」とね。で、このKeeping the rhetoric lowというのは言葉遣いを慎めという日本側への警告でしょ。とても「満額回答」とは言えないよ。

浅田　もちろん、ロシアがウクライナでやってるように、中国が東シナ海・南シナ海で力による国境変更を目指してる、その強引なやり方は認められない。そこでアメリカの抑止力を再確認しようってわけだけど、その前に日本とASEANをはじめとする諸国との連帯強化のほうが先決じゃないかな。

田中　確かにね。で、その場合も中国包囲網を一緒に形成しようぜと上から目線で周辺諸国に持ちかけては、かえって日本の孤立化を招く。

　ここでもオバマの肩を持つわけではないけど、「事態をエスカレートさせ続けるのは、重大な誤り（profound mistake）だ」と警告されているでしょ。この単語も深刻で、挑発し怒りを買う理解しがたい過ちというニュアンスでしょ。無論、それは中国に対するシグナルでもあるけど。

浅田　他方、自由貿易を進めるのなら、非現実的な理想論と言われようが、WTOでグローバルな自由化を目指すのが筋なんで、TPPのような地域ブロックをつくるのは邪道、しかもTPPはアメリカがアジア地域の経済成長を取り込むためのものなんで、すでにアジア地域と深く結びついた日本にとってはとくにメリットはない。

田中　いやはや、3年近く前から我々が言い続けているのにね。

対中姿勢として見習うべき？台湾の「ヒマワリ学生運動」。

浅田　そんななか、台湾で馬英九総統と国民党が中国とのサーヴィス貿易協定を強引に進めようとしたのに反発した学生たちの抗議行動は、注目に値するね。これはいわば逆TPPで、中国に経済的に呑み込まれるばかりか、メディアの買収を通じて世論を支配されるといったことも起こりかねない。それに危機感を抱いた学生たちが3月18日に立法院（議会）を占拠、世論も彼らを支持した。立法院長も彼らを力で排除するのを控え、4月6日になって、学生たちの要求の通り中台協議をチェックする仕組みができるまで協定の審議はしないと明言、これを一定の成果として学生たちも整然と占拠を解いた。一時、過激化した学生が行政院に突入して排除されるといった事件もあったし、今後も予断は許さないにせよ、総じて「しなやかな抵抗」を貫いたところは大したものだと思うね。中国を恐れるあまり、アメリカに呑みこまれてもいいと言わんばかりの日本の反中国派も、少しは見習うべきじゃないかな。

田中　米国型の株主資本主義だけでなく中国型の国家資本主義も、社会や家族の人間的関係や文化・伝統といった「市場では数値に換算できない物」＝価値ゼロだと捉える金融資本主義の妖怪と一緒になって跳梁跋扈する中、今回の「ヒマワリ学生運動」は実に象徴的だったと僕も思うよ。

　国民党の一党支配が続き、1987年に戒厳令が解除された台湾は、2000年の総統選挙で民主進歩党の陳水篇政権が誕生し、国民党で総統を務めた李登輝も支援する中で国民の期待が高まった。でも、台湾独立を唱える一方で不祥事が相次いで、どこかの国の政権交代と同じく失速してしまう。で、国民党に戻ったら馬英九政権下で今のようなリバウンド状態になってしまった。といって鎖国するわけにはいかない。こうした状況下で中国から巨大資本がなだれ込んできたら、商売は言論はどうなるんだという不安から抗議行動が起きた。

　香港では、すでに香港らしい市場（いちば）が崩壊し、市場経済社会になってしまった。日本も、市場と市場経済をいかに融合させるかというお手本として、「ヒマワリ学生運動」を捉えるべきなのに、ほとんど報じられなかった。

浅田　もちろん、台湾は中国との関係なしにはやっていけないんで、国民党と資本家たちはサーヴィス貿易協定による関係の深化を急いだ。だけど、香港がすでにそうなってるように、経済的な依存が強まると、田中さんの言うような市場経済の暴力に加え、政治的にも中国に押しまくられるおそれが出てくる。それに対して学生が敏感に反応し、市民も支持したわけだね。

田中　今回のリーダー役として注目された台湾大学大学院生の林飛帆が、一般市民にもらったヒマワリの花を手にして、立法府を占拠する抗議行動のシンボルにしたのは、官邸前抗議行動の白い風船にも増して、実体のあるパフォーマンスで秀逸だった。反体制的な既存の勢力とは一線を画して、ＩＴ部や食料を担当する兵站の部署に至るまで、学生たちを統率したのは大したもの。日本では出てこない動きだよね。

浅田　立法院から退去するとき、世界の市民の援助に感謝するメッセージを6か国語でネットに発信した、あの手並みは鮮やかだね。

　おそらく中国の内部にも「ヒマワリ学生運動」のような連中は増えてるし、ネットによる連帯の機も熟してきてる感じはする。むろん共産党の弾圧も厳しいからなかなか表に出てこれないけど。

田中　現政権のなかにも危機感を抱いている向きは少なからず存在するだろうし、その意味では国益改め国民益を考えるよい意味でのトロツキスト的人物が今後、現れてくるんじゃないかな。

浅田　最近も、共産党幹部の子弟が中国のイメージをよくするためノーベル賞受賞者の劉暁波を釈放するよう党指導部に働きかけてるって報道があったくらいだしね。

　胡燿邦元総書記の息子の胡徳平が来日して鳩山由紀夫元首相や丹羽宇一郎前駐中国日本大使と面会してたけど、胡燿邦の改革路線のまま行ってたら中国ももうちょっとスムーズに民主化できたかもしれないな。保守派に追い落とされた胡燿邦の死後、学生たちが天安門広場に集まって民主化を求めたとき、李鵬のような保守派が徹底弾圧を主張し、最高実力者の鄧小平がそれに乗っちゃった。後任の総書記の趙紫陽が天安門広場の学生たちを訪ねたときは、彼の言う通りすでに手遅れだった……。

田中　江沢民・周永康とその背後に巣くう軍産複合の既得権勢力を、習近平体制がいかに溶解させていくかが最大の課題となっている。そうした中での胡徳平の来日は、習からの深いシグナルと捉えるべき。

浅田　天安門事件の起きた１９８９年は、ネットも未発達で、ＦＡＸで情報を交換してたくらいだけど、35年経って、ネットを駆使しながらしなやかな抵抗を演出してみせた台湾の学生運動には、ある種の成熟を感じたな。むろん、近年のジャスミン革命の経過を見たって、必ずしも楽天的にはなれないけれど……。

田中　その意味でも、欧米だけでなく中国、そして実は日本も、「脱・市場万能主義」の社会を政治や経済が編み出せるか否か、問われている。昨年末にローマ教皇フランシスコが２８８節に及ぶ使徒的勧告「福音の喜び＝エヴァンジェリイ・ガウディウム」で容赦なき警告を与えていたのも、まさにこの点。

実は活字こそアナログではなくデジタルなんだ。
好きな時に好きな場所で好きなだけ読める。（田中）

田中康夫
たなか・やすお●1956年東京都生まれ。
一橋大学法学部卒業。大学在学中に『なんとなく、クリスタル』で文藝賞受賞。
長野県知事、参議院議員、衆議院議員を歴任。

書店、そして、知的所有権。ネット社会に脅かされるもの。

浅田　今日は『代官山蔦屋書店』で憂国呆談の公開トークイベントを開催するわけだけど、書店として質量ともに充実してるだけじゃなく、サロン的な機能も備え、若者はもちろん、孫のいるような老人をも顧客層として重視していこうっていうポリシーは、書店の未来像を模索する試みとして注目に値すると思うね。ＩＴ化が進んで電子書籍が一般化するにつれ、書店の役割は縮小していかざるを得ないだろうけど、現状ではまだネット書店で内容の一部を閲覧するより紙の本を手に取ってぱらぱら見たほうが中身が早くよくわかるし、本当に大切な本はやっぱり紙の本として手元に置いときたい気がする……。

田中　実は僕にはトラウマがあって、「けっ、田中康夫なんて、中身がなくて」と読書好きな書店員に小馬鹿にされるのではと本屋に入る度に自虐的に構えちゃう（苦笑）。冗談はさておき、その昔に首相だった宮澤喜一がこんなことを言っていた。自分は朝6時に起きるとラジオを聞きながら身繕いをすると。テレビだとアナウンサーや現場のレポーターが「ここで事件が起きて、この通りのこっち側で」と映像や図表に頼ってしゃべるけど、ラジオのニュースはどんなに駆け出しの記者でも、現場の状況を誰もが想像できるように伝えなくてはいけない。だから文章が練られている。それで朝は必ずラジオをつけるんだと言ってて、なるほどと感心した覚えがあるよ。活字の力と似ているよね。

浅田　そう、古いメディアの制約が逆にプラスに働く場合もあるんだよね。情報を得るだけだったらネットでいいし、自分の興味のある情報を芋づる式にたどるにも便利なのは確か。ただ、紙の新聞や雑誌をめくってると、興味のない部分でも見出しくらいはざっと目に入ってくる、それは不便であるがゆえの効用なんだよね。

田中　実は活字こそアナログではなくデジタルなんだ。好きな時に好きな場所で好きなだけ読める。

浅田　あと、書評ってものが書店員のＰＯＰやネット書店の読者レヴューに取って代わられ、文壇の文学賞より「本屋大賞」のほうが影響力を増すって状況は、一種の民主化のようにも見えるけれど、むしろ市場化の一環なんで、やっぱりそれだけじゃ文化が薄っぺらいものになっちゃうと思うな。むろん、いまは大新聞の書評だってひどいのが多いよ。でも、「おすすめ商品の紹介」や「ユーザーの感想」みたいなものだけになっちゃうと……。

田中　「食べログ」と一緒になってる？

浅田　まったくそう。文学賞の類も文壇内部の論理で決まってるところがあってぼくは嫌いだけど、「本屋大賞」ってのも「売れ

線商品のベスト・テン」みたいなものでしょう。少なくとも、ぼくにとっては「本屋大賞」の候補にノミネートされた本ってのは自分とは無縁な本なんだと判断する基準にしかならない（笑）。そういう商業的価値だけじゃない、文化的価値ってものがあるんだから。

田中　誰もがブログやツイッターで発言する時代だから、「本屋大賞」の発想自体はアリだと思う。でも、投票結果を集計しても1か月間は投票した書店員らにも公表せず、その間にPOPから新聞広告から準備万端にして、それで発表の式典を大々的にというのは、リアル書店を脅かすネット販売を生んだ市場経済ならではだけどね（苦笑）。

浅田　ともかく、日本は遅れてるって言うか、ネットに対して本と新聞がまだ健闘してるほうなんで、アメリカなんかじゃ、新聞や雑誌はネットに押しまくられてるし、街から本屋が消えつつあるからね。アメリカはもともと本屋が少なくて、地方の大学に行ったらまず本屋がどこにあるか聞かないと、町を歩いてたって見つからない。それがさらに減っちゃったわけ。マンハッタンにも数軒はシャレた本屋があって朗読会なんかをやってた、それもほとんど潰れちゃった。結局、アマゾンで買うしかない。もともとシアーズのような通信販売の国だったんで、こうなるのも当然だったのかもしれないけれど。

田中　そうやって突き詰めていくと本の装丁も必要なくなって、タイトルと番号だけが記された味気ない世界になりそうだ。

浅田　書店だけじゃないんだよね。かつて、非実験系でも大学に行く必要があったのは、図書館があって内外の学術書や学術雑誌、さらには学術雑誌に載る前のプレプリントが読めたからなんだけど、今はほとんどネットで読めるから、そういう意味では大学へ行く必要は減ってきた。むしろ、他では会えないような教師や仲間と直接触れ合えるってことが大事になってきたわけ。

それで思い出したけど、従来は、学術雑誌に論文を載せる前に、プレプリントのディスカッション・ペーパーを配って、学会やセミナーで発表し、そこでの批判を踏まえて論文を仕上げる、で、投稿した論文は、匿名の学者たちによるピア・レヴューをへてはじめて掲載されるってのが普通だった。ところが、たとえば生命科学、それこそSTAP細胞にかかわる再生医学なんかになると、莫大な利益がかかわってくるだけに、まず特許を申請して先に唾をつけ、それから論文を書いて辻褄を合わせる場合も増えてきたらしい。当然、辻褄を合わせられない場合も出てくる。小保方晴子のSTAP細胞論文が疑問視されてる、それもこういう流れの中で出てきた事件なんで、理化学研究所でこの件を不正と判定した委員会のメンバーの論文についても次々に疑惑が指摘されてるのを見ると、問題はかなり広がってるようだね。

浅田 彰
あさだ・あきら●1957年兵庫県生まれ。
京都大学大学院経済学研究科博士課程中退。京都造形芸術大学教授。
83年に出版されたデビュー作『構造と力 ―記号論を超えて』はベストセラーに。

柄谷行人の言うように、昔、医術や錬金術のような秘術は秘伝で、代償に高いお金を請求してた。ところが、近代科学は公開が原則で、誰でも自由に追試や応用ができ、だからこそ着実に進歩してきた。技術的応用に関して特許制度はできたものの、科学そのものは公共の知識だったわけ。ところが、いま言った生命科学のように、バイオ技術が巨額の特許料に直結するとなると、科学そのものの公共性が揺らいでるのかもしれないね。薬学や農学になると、たとえばインディオの呪術師が使ってた薬草の遺伝子を解析して勝手に特許権を取り、インディオからさえ使用料を請求しかねないようになってきてる。こうなると前近代の秘術もびっくりだよ。

田中　まったくね。知事時代に「未来への提言～コモンズから始まる、信州ルネッサンス革命～」を座長として答申して下さった宇沢弘文が繰り返し語ってるよね。アマゾン流域の少数民族には、樹皮や草木から何千種類もの漢方薬のように薬を煎じる処方を知ってるメディスンマンやシャーマンがいると。その調合されたサンプルを分析して新薬を開発する多国籍企業の製薬会社が莫大な利潤を得るのでブラジル政府が仲介役となってアマゾンの長老たちに特許料を支払う制度を設けたら、逆に拒否されたと。自分の知識が人々の幸せに活かされるなら、こんな嬉しいことはないし、金銭に換えるなど卑しい話だと。

いたく感動して彼は、森林も道路も教育もそれらは特定の人の所有物ではなく社会的共通資本なのだという考えに至るのだけどね。まあその意味では現代のネット社会は本来パテントフリーの世界。ブログに歌詞を1、2行引用するのも許諾が必要ってのは極めて新自由主義的で、公益資本主義とは言えないよね。むしろ、知的所有権を逆手にとって、そこで生じた金を社会的共通資本やパテントフリーなものに還元していく仕組みが必要なんじゃないかな。

浅田　情報はいくらでも複製できるんで、自由に無料でシェアできるってのが理想だと思うけど、じゃあ価値の高い情報をつくった人――作詞家や作曲家、さらには巨額の費用を投じて薬やソフトウェアを開発した人にどう報いるのかって問題もある。当面はそこでバランスを取っていくほかないんで、知的所有権をただちに無視するわけにはいかないけれど、それだけを絶対化すると、科学や文化まで資本主義の論理で毒しちゃうことになるんだよね。中国のように知的所有権を無視して何でも勝手にコピーするのは問題外だけれど、アメリカのように何にでも知的所有権を設定して使用料を請求するってのはどうなのか。TPPでも知的所有権が問題になってるんで、日本も気が付いたら訴訟の嵐に襲われることになるかもしれないよ。

ウェブ憂国呆談も進行中！ www.sotokoto.net